

茂吉と芭蕉

—その古典撰取の態度を中心にしての序説—

滝 典 通

嘗て「新古今と芭蕉」と題した小論において、芭蕉を生
活と芸術・現実と理想を、みごとに提携抱合せた偉大な
作家であると論じた時、註短歌の歴史にあって、芭蕉と比肩
し得る偉業を完成した作家は、近代の歌人斎藤茂吉である
うと述べた。それは勿論本筋から離れた、いわゆる印象批
評的な附言に過ぎなかったが、今もこの言葉を間違いで
ないと信じている。

両者は確かに、その資質、古典観、創作態度其の他あらゆる面において、著しい類似点を持った作家といわねばならない。小論は茂吉における芭蕉の投影を探ると共に、その古典撰取の態度を中心として、両者の芸術創作態度の親近性を窺って見たい。

○ 茂吉と芭蕉の連関性を主題として論じた研究は管見に触れないが、両者の芸術の親近性を暗示した言説は、諸先人

茂吉と芭蕉

の茂吉論中にしてしばしば表われている。

茂吉の讚美者である詩人佐藤春夫氏は、茂吉を評して、
ことばを愛し、「舌頭に千転して」作歌する「天衣無縫の技
巧家」であり、芸術派の作家であるとし、

茂吉は古心を得た近代人が古代の詩形を愛用してゐる
やうなどでも言へばよからうか。……努めて古心に達し
たところが好ましいとも言はうか。この点茂吉は芭蕉に
似てゐる。(註)

と、両者の類似点を指摘しており、風巻景次郎氏も、茂吉
の資質に潜在した「仏教的諦念と、汎神論的世界観におい
ても、宋元の芸術や、芭蕉の心境などと比肩し得るところ
まで行つた……。」と論じ、そこから生み出された「写生
論」についても、

それが、「万葉」風の素朴な現実主義—日本風の古典的
世界—に近いか、「新古今」の感傷を通過し、宋学の唯心

論的形而上学の影響をも受けたらしい芭蕉あたりの象徴主義に近いか……

と、重大な疑問を提出しているのである。

なお、この仏教的諸念に關して、加藤将之氏は、

その歌に現はれたる無常觀は、仏典や梁塵秘抄や芭蕉俳諧などによつても培はれたのである。^(註4)

と述べ、両者の關連をより積極的に肯定している。

以上、茂吉と芭蕉の親近性に触れた二、三の代表的所説を挙げたが、この他、俳句において生涯芭蕉を礼讃してやまなかつた芥川龍之介が、短歌にあつては茂吉一人に心酔し、

私の近代短歌についての開眼は、誰の手によつてもない。斎藤茂吉の手によつて施して貰つたのである。^(註5)

と語つたというエピソード、或は、子規の流れを汲むホトトギス派俳人達の、茂吉短歌に示す深い理解と共鳴等も、茂吉短歌と芭蕉俳諧の同質性を暗示する力強い事実であると言わねばならない。

両者の生涯を一瞥しても一勿論、元祿と近代の生活の差は否み難いが一おのが俳諧を夏炉冬扇と観じつつ、尙この一筋につながつて一生を終り悔いなかつた芭蕉と、「微かなる我が歌よ、…欠伸の如かれ」と自認しつつ、尙この伝来の短歌形式に執し、「無常の世の短き生涯に、願はくはまこ

との己の一部を残したい。」^(註6)という悲願のもとに、死に至るまで歩兵の如く歩みつづけた茂吉との親近性は何人も否定出来ぬであろう。

期せずして、両者の詩歌史的位置に關する評価も又さこぶる似ているのである。

芭蕉の俳諧は「和歌の伝統と中国の詩風とを結合し、日本詩歌に一つの帰着点を与へたもの」であり、それが短歌の地位をうばつて、「日本詩歌の正系を繼承し」大成したとする岡崎義恵氏等の説は、既に定説となつていふと言えよう。しかして、茂吉の短歌に対しても、「古来の純粹な民族的抒情詩のなかに舶来の近代の心理（それも家常茶飯の刻々の心理の流）を具體的に捕捉したものを、電流のやうに三十一文字のなかに導入した」もので、「古来の歌の完成」と見る佐藤春夫氏の提言は、氏の謙遜にも拘わらず、やがて定説となるのではなからうか。

かように、両者を共に詩歌の伝統に立脚した古典美の大成者として賞讃する反面、その現実性に対する非難が両者の芸術につきまといつてゐる点も、亦軌を一にしている。

芭蕉に対して、近藤忠義氏は、

その文学活動の他の一端に於て、蕉門は一歩後退した。それは「古典への迎合」である。…談林の俳諧が、少くともその題材の上で、既に頼もしく試みつゝあつた近世

町人生活の尖鋭な取り上げを、芭蕉に至つて遂に放棄したのである。右のやうな点に、蕉風俳諧の消極性があり、その近世現実主義に対する否定的態度が見られる。

と言ひ、臼井吉見氏も、折口信夫氏の「猿蓑」の古典主義から「炭俵」の自然主義へという鋭い芭蕉論に讃意を表し乍ら、

「炭俵」の境地に出た芭蕉にとつても、事実尊重の素朴なリアリズムとは所詮無縁だつたこといふまでもない。と、否定的態度をとつてゐる。

茂吉に対しても同様で、臼井氏は、茂吉の写生論の本質が「客観的現実把握の正確さよりは、『実相に観入』する『歌ごころの衝迫』」にある事を指摘し、従つて彼において「『観入』する『実相』の内容実質、『歌ごころ』そのもの内容実質は問題となる余地がない。」と論断し、

狭い短歌、俳句の世界を越えて文学全般に及んでゐた子規の明確な現実的批判的精神は茂吉に至つて著しく稀薄化した。

と慨嘆し、杉浦明平氏は、万葉調・短歌形式という二面から「茂吉の近代とその敗北」を語り、佐藤春夫は、茂吉の素性の面から、

その生活感情の近代性は或は逍空に及ばず時々空疎な観念に絡るものを見る。

と、惜しんでいる。

上来、やゝ煩わしいまで、芭蕉と茂吉の芸術の親近性を示す先人の所説を引用して来た。さて、近代と元祿、短歌と俳諧という、時代、ジャンルの相違を越えて、その芸術の根柢に見出される類似性は、果して両者の資質に基いて、何等の影響關係なく無縁に育まれたものであろうか。

周知の如く、茂吉は子規によつて作歌に出発し、万葉調に開眼した。子規は、万葉精神を近代に呼びもどすと共に、他面芭蕉をも復活させた多力者である。子規において、万葉と対峙して存在した芭蕉が、茂吉の創作精神に根強い影響を持ったと考へるのは、むしろ自然であると言わねばなるまい。

茂吉は、短歌を「生」のあらわれと観、現実に触発された感動をあくまでも重視しようとする、純真素朴な創作の根本精神を万葉に学び、同時にその感動を生そのままの吐露に終らせず、無限をはらんだ芸術美の極致に抱合昇華させる象徴的方法をひそかに、芭蕉の俳諧に学んだのはあるまいか。

以下少しく、茂吉における芭蕉の投影を考察してみよう。
○ 茂吉の芭蕉尊重の経路については、彼自身次のように語つてゐる。

正岡子規は専門家であつたから、芭蕉を読み、芭蕉を尊敬したことは論を須るないが、歌人としても、伊藤左

千夫とか長塚節などは、子規の門人であるから、随分昔から芭蕉のことを云々してゐた。長塚節のものに芭蕉の影響のあるのはそのためである。僕らが芭蕉を尊敬するに至つたのは、さういふ先輩の教に本づいてゐる……

右の文に見ても明らかのように、茂吉の芭蕉への開眼は、彼が短歌創作に志した明治三十八、九年の頃に初まり、子規や彼の師左千夫、先輩節などを通じてなされたものである。その後、彼が芭蕉に強い関心を示したことは、芭蕉の句集や俳論を愛読している事実が物語っている。そして、

芭蕉などの社会上の位置はどんなものであつたらうか。佐々博士の説に拠ると極めて地味な寂しいものであつたらしい。おれの目から涙が湧いてくる。勿体ないと思ふのである。

とまでの、深い尊敬の念を捧げているのである。

作品の面でも、芭蕉の句の影響を認められるものは、相当数ある。今、初期の作で、茂吉自身が影響を認めているものを挙げれば、

蚕の部屋に放ちしほたるあかねさす昼なかりしかば首は赤しも（赤光）

昼見れば首筋あかき螢かな（初版「赤光」より引用）

よひよひの露ひえまざるこの原に病雁おちてしばしだに居よ（たかはら）

病雁の夜寒におちて旅寝かな（猿蓑）

のように、用語のみでなく、着想の点まで類似したものをはじめ、

かがやけるひとすぢの道遙けくてかうかうと風は吹きゆきにけり（あらたま）

目をとちて二人さびしくかうかうと行く松風の音をこそ聞け（同）

かうかうと西吹きあげて海雀あなたと空に澄みゐるて飛ばず（同）

かうかうと（からからと）折ふし凄し竹のしも（芭蕉句選拾遺）あらたふと青葉若葉の日の光（奥の細道）

ちひさけど命ふたつの光らめとをさなごも照る磯に著きたり（あらたま）

命ふたつ中に活たる桜かな（甲子吟行）

等がある。

其の他、彼がお蔭を蒙つたと明記していなくても、あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり（あらたま）

あかあかと日はつれなくも秋の風（奥の細道）

命たえし祖母のかうべ剃りたまふ父を囲みしうからの

目。の。な。み。だ。(あらたま)

ゆく春や鳥なき魚の目はなみだ(奥の細道)

程度の部分的な用語の投影を見うるもの、ないし、一首の情調において、芭蕉の句の影響を受けたものは、恐らく相当数に上るであろう。

勿論、茂吉の短歌は、万葉を筆頭として、尤大な古典の世界を背負っており、以上のような芭蕉の句の投影は、とり立て、言うほどのことではないであろう。

たゞここに注目せねばならぬのは、古典摂取の根本的態度方法において、茂吉が示した芭蕉への共鳴である。

芭蕉が日本中世の和歌連歌や、中国の杜子美を深く深仰し、それらを自己の俳諧の中に摂取し、生かしている事は周知の事実である。そして、中にはその取り方が相当露骨極端なものもあり、批評家の非難を受けている程である。

例えば、彼の代表作の一つに数えられる「あかあかと日はつれなくも秋の風」(奥の細道道中の吟)は「はいかい袋」によると、「須磨は暮れ明石の方はあかあかと日はつれなくも秋風ぞ吹く」(作者出典不明)をとったものだとしている。この古歌の出所が分らぬので、果して芭蕉の句がこれに基づくか否かは問題だが、もし仮にこの古歌にとったところば、極めて極端な摂取と言う外ない。

ところで、子規がこの句を、

芭蕉は之(前掲の古歌)を剽竊したるに過ぎずして、一文の価値をも有せざること勿論なり

と酷評したのに対し、茂吉は反対して、

寧ろ梅丸の「ただ彼妙此妙自然の吻合をしらしむるのみなり。」に從はう。

と言い、

若し今この古歌の存在を仮定して論ずる場合に、芭蕉の句は単に剽竊模倣のものであるといふ事を予は否定するのである。

と、この句の価値を認めている。

こうした芭蕉の古典摂取に対する理解と共鳴は随所に見られる。そして、その共鳴の根元が、芭蕉の古典摂取の態度が、単なる用語の形骸の模倣に終らず、「少くとも現実の相から導き入れた手法であり」深甚の性命の交通があつて「しかる後の採用による点を強調している。少しく長文で煩わしいが、芭蕉の古典摂取の態度を賞讃した茂吉の言を掲げよう。

芭蕉は何も読んでゐないやうな顔付はしてゐても、鬼に角文学の専門家であるから、自分の俳句には、実にいろいろなるものを採入れてゐたに相違ない。その採用の爲方は、表面的でないから一寸見には分からないが、実は体得しての採用であるとおもふ。新古今時代の幽玄の歌

調を採入れてゐても、それが全く変つたもののやうに見えるほどである。……ひそかにおもふに、芭蕉は旅をして、實際を観ることあれほど深かつたが、それと同じ程度にやはり読書の方にも勉強したのではあるまいか。芭蕉が元禄七年花屋で歿した時も、遺物の中に、孟浩然詩集があつたほどで、芭蕉は旅中でもさういふ書物を読んだことが分かる。たゞその迹が、馬琴などのごとく、ペダンテリーに見えないから、露骨ではないが、読書をするにも静かに読書し、一々自分の経験とひき較べて、たゞの知識としてでなしに、直ちに、俳句力量上の観入と表現との潜勢として採入れたものでなからうか。

以上のような芭蕉の古典撰取の態度方法は、とりも直さず茂吉自身のそれを物語るものなのである。茂吉は太田水穂に模倣剽竊とのしられた、前掲の「病雁」の歌の弁で、

古人も病雁を憐み、杜甫も「孤雁不飲啄、飛鳥声念群」の句があり、芭蕉なども病雁を歌つてゐるが、僕も

自分の感慨をあらはしたいと思つて「病雁おちてしばしだにゐよ」といふ一つの歌を作つた。……僕は今健康を害してゐる。その寂寥の気持がこの歌を成さしめたのであるまいか。

と説いて、彼の病雁の歌が単なる形骸の模倣に終るものではなく、紅血を古語に交通させた、彼自身の真実の表現で

あることを強調しているのである。

佐藤春夫氏が指摘したように、茂吉は確かに先天的な伝統詩人である。

吾等が血脈の中には祖先の血がリズムを打つて流れてゐる。祖先が想に堪へずして吐露した詞書が、祖先の分

身たる吾等に親しくないとは吾等にとつて虚偽である。という宿命的な信念に立脚して、古人の精神を尊び、その精神を宿した古語の声調を、撰取し、体得し、その中に近代人茂吉の紅血を通わせようとしたのである。

元禄の庶民生活を古典美の世界に引き上げた芭蕉の俳諧も、近代の現実を古典美へ昇華せしめた茂吉の短歌も、共に如上の古典撰取の根本態度から完成されたものである。

茂吉は自己の短歌に古語を採用することを論じた条で「赤草紙所載の蕉翁句作の有様を読むと、決して我等の態度の邪でないことが分かる。」と述べている。この言が彼の「短歌写生の説」を確立しつゝあつた時期に当ることを思う時、とりわけ大きく芭蕉が茂吉の芸術の方向を決定する存在となつたのではあるまいかと思われる。

以上、芭蕉と茂吉の関連を述べたが、顧みて、引用文の多いまとまりのない文に終始してしまつた。両者の關係を見る上で、宗教の問題―茂吉が十五才の頃、僧侶にならう

とした事や、芭蕉と仏頂和尚との関係に比すべき、茂吉と佐原篁心和尚との関係、芭蕉俳論と茂吉の写生説の類似点、改作・虚構等に対する両者の態度、その他、触れたい問題が多々あったが、想をまとめる余裕がなかった。

ただここでは、万葉とならんで芭蕉俳諧が茂吉の短歌の方向を決定づける大きな力となったのではあるまいかという試論を提示するにとどめる。(一九五六、二、九)

註1 立命館文学 一九五二、第九〇、九一合併号

註2 「茂吉小論」(藤森明夫編「齋藤茂吉の人間と芸術」所収)

註3 「近代詩人としての齋藤茂吉」(文学一九五三年七月号)

註4 中野重治著「齋藤茂吉ノオト」十二「宗教的といふこと」より引用

註5 中村草田男氏の「俳人の眼に映ずる茂吉先生」(茂吉全集月報3)より引用

註6 童馬漫語 33偶語(全集十四卷四九頁)

註7 同右。15作歌の態度(同右二八頁)

註8 「芭蕉の史歌史的地位」(解釈と鑑賞・二八年十月号)

註9 「齋藤茂吉の及び文学」(雑誌「短歌」三九年三月号)

註10 「日本文学原論」第五章 町人文学論 第三節(近世リアリズム参照)

註11 「芭蕉における虚構の意味」(文学 一九五二年二月号)

註12 「茂吉の問題」(短歌誌「八雲」二十三年新年号)

註13 「茂吉の近代とその敗北」(文学 一九五二年二月号)

茂吉と芭蕉

註14 「茂吉小論」(前出)

註15 自作「病雁」の歌の弁(全集十八卷 二二六頁)

註16 童馬漫語 75、87、や「万葉尊重、詞の吟味に就て」(全集十四卷二七八頁) 其の他参照。

註17 童馬漫語 96 短歌作者(全集十四卷一三五頁)

註18 子規「芭蕉雑談」

註19 「万葉の尊重、詞の吟味に就て」(全集十四卷三〇〇頁)

註20 同右(二九八頁)

註21 「病雁」といふ語に就て(全集十八卷二〇三頁)

註22 自作「病雁」の歌の弁(全集十八卷二一九頁)

註23 童馬漫語 16 歌ことば(全集十四卷三〇頁)

註24 「ことばの吟味につらて」(全集十四卷二七八頁)

附記 本稿校正途中柴生田稔氏が「茂吉と俳句」という一文を雑誌「俳句」(角川書店刊) 六月号に発表され、その中で茂吉と芭蕉の関係について種々説いていられる。参考のためここに附記する。(一九五六、五、三二)